唐木順三全集

筑摩書房版

唐木順三全集第一卷

昭和四十二年八月二十五日初　版第一刷發行
昭和五十六年　七　月　一　日增補版第一刷發行

著　者　唐　木　順　三
發行者　布　川　角　左　衞　門
發行所　筑　摩　書　房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番號　一〇一－九一
電話　東京(291)七六五一(營業)
東京　(294)六七一一(編集)
振替　東京　六－四一二三

印刷　株式會社精興社
製本　鈴木製本株式會社

Printed in Japan　0395—74501—4604

乱丁・落丁本の場合は，ご面倒ですが小社読者係あてに
ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目　次

現代日本文學序說

序……三
一　現代日本文學に於ける自然と道德の問題についての史的考察……七
二　自然主義の發生とその沒落……四六
一　概　觀……四六
二　紅露の文學……五二
三　透谷、樗牛の浪漫主義……六六
四　自然主義……七三
五　啄木の自然主義批判とその止揚……一〇〇
六　人道主義、新浪漫主義……一〇八

三　國木田獨歩における自然について……二三
四　島崎藤村小論……*(1)
五　志賀直哉論……二六
六　山本有三論……一五三
七　二葉亭・透谷・啄木……一七三
八　夏目漱石論……*(2)
九　芥川龍之介論……二〇四

近代日本文學の展開

序……二四三

I

明治文學に於ける自我の發展史……二四八
明治文學と不安の精神……二六三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『浮雲』とその時代……二七一
近代文章史と寫生文……二八八
近代文學と生活の問題……三〇一
自然主義の一樣相……三二一
歴史文學の問題……三三五

II

北村透谷……三三八
森鷗外……*(3)
小倉時代の鷗外……*(4)
漱石に於ける現實……*(5)
國木田獨歩……三三四
德富健次郎……三四七
詩人としての岩野泡鳴……三六二
田山花袋……三七四

島崎藤村……三八〇
徳田秋聲……三九四
葛西善藏……四〇二
宇野浩二の文章……四一七
横光利一……四二六
小林秀雄……四三二
島木健作……四四〇
後記……四四七

*(1)(2)(3)(4)(5) この部分については巻末「後記」を参照されたい。

編集部

現代日本文學序說

序

一においては、現代日本文學における自然と道德の相關の問題を中心として、問題史的な敍述を試みた。これはこの著作のひとつの總括である。**二**は、自然主義の發生經路、自然主義自身の主張、その沒落の必然性、及びそれに對する啄木の批判を中心として扱つた。紅露の文學に多くの紙數をさき、人道主義、新浪漫主義の主張に簡單ながら筆をのばしたのは、これによつて、現代文學史の大觀をえんがためである。**三**において、通例自然主義者の一人に數へられる獨歩を、特にきりはなして論じたのは、獨歩が、自身自然主義者の中に入れられるのを喜ばなかつた如く、ひとつの獨自の位置を占めてゐると信ずるからである。**四**の藤村小論は單なる素描にすぎず、**五**の志賀直哉論と共に、全體との關係は顧みられずに書かれたものである。**六**の有三論を、**一**の有三の項と併讀されるならば、**九**との聯繫もつくであらう。

七、**八**、**九**においては、最初、文學と社會との相關の問題を中心として、一貫せる敍述をする計畫であつたが、中途、夏目漱石の評論が意外の方面に展開し、一個の漱石論として獨立のものとなつたため、外形的には最初の計畫を放棄した形となつた。（**一**はこの計畫の延長として、また全體の總括として生れたものである。）だが注意深い讀者は、この三篇を通じて、ひとつの問題の史的展開の跡を見出すであらう。**七**においては、文學と社會との距離に惱んだ三人の、いはば先驅者の文學觀が見られる。**八**の漱石は、文學者と現實社會との距離を自ら

感じてゐる。彼が自らの位置を示すに、矛盾せる二つの言葉を合せた「道樂的職業」を以てしたのは、明かにそれを證明するであらう。彼の文學史上の位置を我々は精神的貴族の文學として特徴づけることが出來る。**九**の龍之介は、文學者としての彼の屬する社會と現實社會との距離を知りつくしてゐる。沒落してゆく階級と勃興しつつある階級の距離である。彼の自滅は、彼の屬した文學圈の沒落の象徴に外ならない。彼の史上の位置を敗北者の文學と規定するに何人も異存はないであらう。

我々は文學と社會との相關の問題を常にひとつの距離として提出せざるをえなかつた。先驅者より直ちに精神的貴族へ、そしてこれの延長としての敗北者へ移らざるをえなかつた。**七**と**九**との間に、文學と社會、文學者と社會、文學者の屬する社會と現實社會の渾然として統一され、何等の距離なき作者を探して求めえざるは何故だらう。この問は卽ち、何故に我國の自然主義が早老に終り、身邊小說に墮し去らざるをえなかつたかの問に通ずる。さらにさかのぼれば、何故に我國のブルジョアジイが、自らの自由の歌を一度もうたひえずして終つたかの問に通ずる。これに對しては**二**の「概觀」等において答へてゐる。

現代日本文學が、逍遙の『小說神髓』、二葉亭の『浮雲』にはじまることは諸家の凡そ一致せるところである。この著作の中に拾はれた作者の名は、なるほどその數において少ない。が、主流に沿うて下つたつもりである。徒らに何々主義、何々派のレッテルを貼らず、また作家の名を列擧して無造作にそれに三、四行の批評を加へることを遠慮したのは、この著作を公にするひとつの意味であらう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

九の龍之介論は、昭和四年九月の『思想』及び同年十一月の『生活者』に分載したもの、**六**の有三論は昭和七年六月の『思想』に、**五**の直哉論は同年七月の『日本國民』に載せたものである。各〻若干の訂正の筆を加へた。**四**の藤村小論、**七**の二葉亭・透谷・啄木は、昭和五年より一年餘の滿洲教育專門學校奉職中、その生徒の有志に講義したものを縮小したもの、爾餘はここではじめて發表するものである。**一**を讀まれるならば、この書の大體の傾向を知りうるであらう。

この書をいま世に公にすることをえたのは三木清氏の御盡力によるものであることを記して謝意をあらはしたい。仲小路彰氏の御好意も忘れることが出來ない。このやうな小著も、多くの人々の教示と援助なくしては成らなかつた。これらの人々を心で數へ、併せて御禮の志をあらはしたい。この書のなるにつけても想ひ起すのは自ら逝いた八百清顯君である。彼は私のこの方面の仕事に對するよき助言者であり、また昨年の九月は會つて、將來の協力をさへ約した。この著作についての、彼の口づからの評言も——彼の言葉は、茫漠とはしてゐるが、ある豐かさをもつてゐた——既に聞きえないものとなり、いまはただ、彼の墓前に獻げうるのみとなつた。

昭和七年七月

唐木順三

一　現代日本文學に於ける自然と道德の問題についての史的考察

序

ここに我々が自然と名付けるものに、その言葉のもつあらゆる意味を包括させたい。

(一)、宇宙構成の二系列を延長と思惟とするとき、殊に思惟するものを人間として特性づけるとき、前者は卽ち自然とよばれる。

(二)、自然は、またありのまま、を意味する。この場合、自然に對立するものは、單なる人爲である。道德、理想その他の觀念的所產を人爲として理解するとき、本能、性慾等の一般に野性的なるものが、自然の名を以てよばれる。このことから、悟性的、または知的人間に對立して、自然的人間をひきだすことが出來る。(一)に於ては人間に對立して自然がおかれた。ここでは人間もまた自然の一部として理解せられる。

(三)、觀察し、觀想すること、また知ることを更に知りうることを、人間の優越的な特性とするとき、自然及び自然的人間は、それによつて對象となる。ここでは觀想的人間のもとに、反つて自然及び自然的人間が、他の一

切と共に包括せられる。

(四)、(二)と(三)を經て、我々はまた更にひとつの自然をひきだすことが出來る。人間を自然の一部とするとき、彼の存在は、蟲けらの如く儚く小さい。また人間の集團たる社會も、そのつくつた歴史も無意味なほど貧弱である。彼の知惠はまた自然の祕密と生命を知るにはあまりに力弱い。と同時に、彼は(三)により、自らの儚さ小ささ、力弱さを知ることが出來ると共に、自然の雄大さ、悠久さ、深奥さを知ることが出來る。雄大さを知りうるものは、雄大それ自身より更に雄大である。で、かういふことになる。人間は自然に對し限りなく貧弱である、とともに自然よりも更に豐富である。

(五)、(二)と類似しながら、それと異なる、或は正反對の自然概念を我々は知つてゐる。(二)に於ては、單なる人爲が自然に對立した。ここでは人倫が自然に對立する。從つて、(二)に於ける、人爲に對する自然の優位の肯定に對し、ここでは、人倫の優位が說かれる。自然の名をもつてよばれる本能、肉慾、激情等は人倫の破壞者として退けられる。自然と人倫は二元であり、或は自然は人倫のもとに狎らさるべきものとなる。

(六)、(五)に於ける人倫の破壞者としての、惡の根據としての、人間に於ける自然的なるものは、同時にまた、善を顯はにする不可缺の存在である。光に對する闇であり、プラスに對するマイナスであり、宇宙生成の唯一の因子であるアダムの原罪である。歴史はこれによつてなり、ファウストはメフィストによつてのみ昇天しうる。人間に於ける自然的なるもののかかる理解がありうるわけである。

(七)、(二)に於ける自然的人間は、同時にまた自然の理法下にたつものである。自然界の理法の、かくれもないひとつの事實は、適者生存の生存競爭、弱肉强食である。この自然の理法の、人間及び社會への導入は、從來

の社會條理とされる同情、愛、相互扶助等と抵觸する。自然はこのとき社會との相關に於て問題とされるであらう。

(八)、最後に、自然と人間、自然と社會との問題に對する辯證法的理解がある。

我々は以上凡そ八つの自然を列擧した。が、私にあつては、それは單なる列擧ではなく、次の意圖のもとに行はれたものである。

封建制度の崩壞、身分制度の撤廢は、個人をその政治的桎梏より解放すると共に、自然へ向つて人間を解放した。現代日本文學の基礎は、『小說神髓』『浮雲』にきざし、紅露の元祿的、封建的イデオロギイを『內部生命論』(明治二十六年)に於て完全に止揚したる北村透谷によつて全く樹立されたとみるのが私の見解である。この透谷によつて樹立され、今日にいたつた現代日本文學、詳しくは日本ブルジョア文學に於ける自然と道德の問題の史的發展の跡をたどり、その聯關を明らかにし、問題史としての文學史を試みんとするのが、この小論に於ける私の野心なのである。

先に列擧した、(一)に於ては透谷、(二)に於ては樗牛、初期自然主義、泡鳴、(三)に於ては觀想的自然主義(花袋、抱月、及び天溪の一面)、(四)に於ては獨步、(五)に於ては漱石、(六)に於ては龍之介、(七)に於ては有三、(八)に於てはプロレタリア文學、その各々が私の顧慮の中にあつた。

ここに八項に分つたものを、單に比較としてではなく、內的聯關として、或は發展として敍述することが、こ

こに努力されるであらう。

一

長谷川辰之助にあつては、自らを、くたばつてしまへ、と、どなりつけるところに、作家二葉亭四迷の文學の世界が生れた。文學はまことに、ざれごとであつた。粹と俠をねらふ紅露の文學は畢竟德川文學の亞流であり、その扱ふ戀愛は卽ち遊廓的であつた。北村透谷に課せられた歷史的任務は、二葉亭四迷なる犧牲的名稱を冠せざるを得なかつた文學の世界を、獨立的な、また一生の事業とするに足る領域に高めることであり、紅露の文學を否定して、ざれごとや、單なる技巧や洒落といふ輕佻を排し、深き生命と高き精神の躍動する文學を樹立することであつた。それは必然的に獨自の世界觀の建設を必要とさせる。透谷の所謂「實世界」に對する「想世界」は如何なる構造をもち、「想世界」に逍遙しうる詩人の靈感の前にあらはれる世界は如何なる面貌をもつか。

其處に我々は明らかにスピノチスムスに出會ふ。

透谷によれば、「宇宙の精神」卽ち「神」は、「造化（ネエチユア）」と「人性（ヒユウマニテイ）」の二系列に沿うて自らを發現し、この兩者によつて、"various manifestations"を展開する。この全構造がその眞實性と生命性に於て認識されるためには、詩人の獨自な「インスピレイション」をまたねばならぬ（『內部生命論』參照）。一切を神の顯現とみるこの詩人の直觀の世界は、外部に對して內部の、有限に對して無限の、現象に對して靈魂の、束縛に對して自由の世界である。この世界に遊びうるを特權とする詩人にあつては、俗社會はひとつの「牢獄」であり、俗情はこれ「獄吏」であつた。長谷川辰之助の實感と眞劍勝負の世界は、ここでは反つて、牢獄となり、現象となり、二葉亭四迷に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com